フォークトラントの楽器製作の現在

横井雅子

Ⅰ　本研究の目的

本研究では、旧東ドイツのザクセンとチェコのボヘミアにまたがるフォークトラント地方において見られる楽器製造の伝統と、体制転換を経て見られるようになった地域再生の有り様を、歴史的経緯と体制転換後の新たな展開の双方の視点から考察し、この地域が今後どのような文化産業を目指そうとしているのかを見極めようとするのが目的である。

この主題の研究はこれまで各論的には行われてきた。とりわけ、一部地域に関する、あるいは特定の種類の楽器製作に関するモノグラフとしては充実したものも発表されている[1]。しかし、楽器産業が隆盛をきわめ、一時は世界でも稀な楽器製作の地であったこの地域を包括的に扱い、一時の衰退を経て再び影響力をもつようになった現状と併せて考察を試みている先行研究は今のところ見当たらない。

具体的には、平成 20～22 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）による研究「楽器におけるわざ学の伝承とグローバリゼーション」（研究代表者：田中多佳子）の一部として、2009 年９月にドイツのザクセン地方において実施した現地調査[2]で得られた情報も援用しつつ、ここでは本研究のこれまでの成果と今後の課題を提示しようとするものである。

なお、本研究は今後も継続するプロジェクトの一部であるが、プロジェクト全体の問題意識は以下の４点に集約される。

①楽器産業の起源であるボヘミアの宗教難民から、EU 拡大後の現代の両国の人的交流までの流れを、音楽学、歴史学、地理学の視点から捉え、説明を試みる。

②特定の楽器製造でその町の特色を打ち出すに至った経緯を、産業構造と音楽嗜好の変化の両面から考察する。

③17 世紀に各種の手工業的な楽器製造が始まったが、社会主義時代にも個人工房が生き残り、それが体制転換後の地域復興につながった実態を解明する。

④わざの伝承を体系的に行うことが古くから意識され、現在は産学連携の動きもある人材育成の在り様を追及する。

Ⅱ　地域と楽器製造の歴史

ここでは、この研究と関わる側面からフォークトラントの地域性と楽器製造の歴史につ

---

[1] たとえば Dullat（1997）、Zoebisch（1999）、Kauert（2000）、Wellner（2004）、Fischer(2006)、特に pp.55-67 の Michaela Freemanová “German music instrument makers and music instruments in the Bohemian lands.”、pp.125-134 の Eckhard Jürgens “Die Instrumentenmacherfamilie Vizenz Ferarius Kohlert aus Graslitz/Kraslice.”。

[2] この現地調査は田中多佳子と横井雅子が 2009 年８月 26 日～９月６日にかけて、イギリスとドイツにおいて実施した。

いて簡略に触れておきたい。

１. 地域

ザクセン自由州（州都ドレスデン）は、1990 年の東西ドイツ統一まで東ドイツに属した地域である。この州のチェコと接する南東部（フォクートラント Vogtland。行政的にはフォークトラント郡 Vogtlandkreis）には楽器作りに従事する小さな町や村が点在している。

フォークトラントは、神聖ローマ帝国の地方監督者であるフォークト Vogt の支配による地を意味する。この地には 11 世紀初頭からドイツ人の入植が始まったとされるが、それ以前の 7 ないし 8 世紀にはスラヴ系住民がこの地に住んでいたとみられている[3]。この地域はドイツ語でエルツゲビルゲ Erzgebirge、チェコ語でクルシュネー・ホリ Krušné hory と呼ばれる山脈がドイツとチェコの国境に沿ってあり、あたかも自然の境界を形作っているかのようであるが、これにより森林地帯が形成され、木材資源が供給されている。また、15 世紀以来、銀、錫、蛍石、鉄、銅などの鉱物資源にも恵まれていた[4]。

一方、山並みがあるとはいえ、500～600mほどの高度（もっとも高い箇所でも 974mの Schneehübel）で交通の障害となるものも比較的少ないため、中世以来、中心都市プラウエン Plauen を要に各方面へと交易路が開かれていった。

このような環境を生かして、この地域では木工業、繊維工業、金属工業が発展した。

なお、この地域は 1993 年に設立された越境協力 Egrensis euroregion[5]のかなりの部分を占めている。

２. 楽器製造の歴史

フォークトラントにおける楽器製造は、一般にはマルクノイキルヘン Markneukirchen で 12 名のヴァイオリン製作者が集まり、1677 年にドイツで最初の楽器製造者のギルドを形作ったことに始まるとされている。この淵源については、佐々木（1995）によれば[6]、現在のチェコに含まれるグラスリツ Graslitz（チェコ名クラスリツェ Kraslice）に 1631 年にヴァイオリン製作者が一人はいたことが確認されているとあり、1648 年から 1677 年の間に 12 人のボヘミア人製作者がザクセン選帝侯領に移住し[7]、上記のギルドを形成したという。このことは、当時のボヘミアを支配していたハプスブルク家が、熱心なカトリック教徒で異教徒迫害を推進するフェルディナントを1617年にボヘミア王に即位させたことと関わっ

---

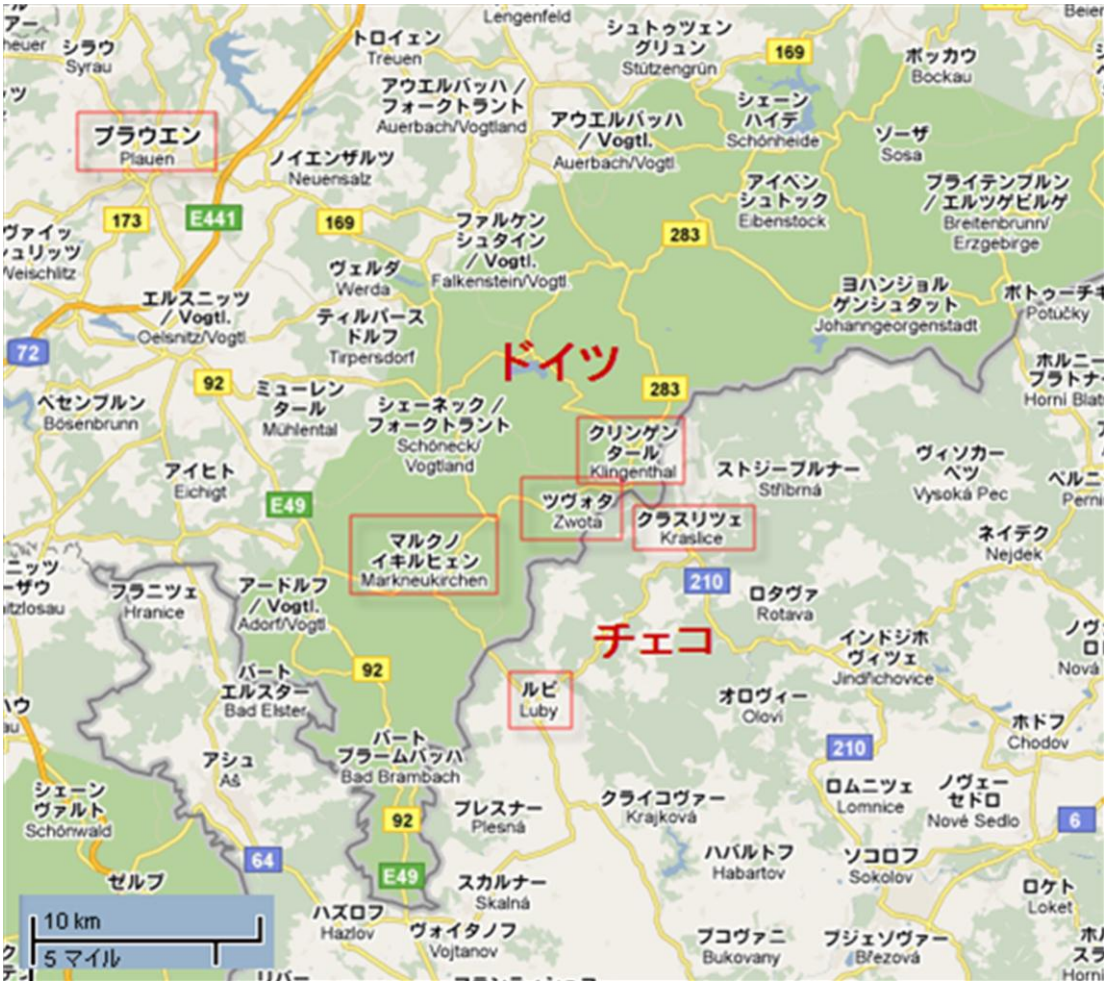
[3] このスラヴ系住民は現在のドイツ国内のマイノリティの一つ、ゾルベン人 Sorben（一般的にはソルブ人の名で知られる）にあたる。

[4] エルツビルゲは文字通りには「鉱石山地」を意味する。

[5] ユーロリージョン Euroregion はヨーロッパ各地で行われている越境協力の総称。ふつう、各地方自治体や NGO 団体などの地域住民に近い立場のアクターによって行われるもので、国家や国境を越えた活動により、経済や文化、教育、環境などを越境的に改善させ、国家を超えて社会の統合にも寄与してきたとされている。詳しくは田中（2009）。Egrensis euroregion（EuroRegio Egrensis）は、このうちのチェコとドイツの間で構成されているもの。

[6] 佐々木の論文は、Kurt Kauert のポツダム教育大学歴史学・哲学学部に提出された博士論文 “Entstehung, Standorte und Struktur de Vogtländischen Musikinstrumenten - industrie unter besonderer Berücksichtigung der Veränderungen seit der Mitte des 19. Jahrhunderts.”（1969）に基づいたもの。この論文は未見である。

[7] カトリックの伯爵家ノスティツが 1666 年にクラスリツェを支配するようになったことが、後述のフェルディナント 2 世のボヘミア王即位とともに、このことの直接的な背景であろう。Dullat（1997）、pp.14-15。



フォークトラントと楽器製造の町

ていると考えることができる。1620 年には「白山の戦い Bitva na Bílé hoře[8]」が勃発してボヘミアのプロテスタント貴族は壊滅し、ボヘミアはハプスブルク家の属領となって多くの宗教難民が発生したが、クラスリツェのヴァイオリン職人もその中の者たちと見なされているからである。白山の戦い後にボヘミアで再カトリシズムが断行されるに伴い、難民が増大したと佐々木、およびクラスリツェの楽器製作史を著している Dullat は考察している[9]。

こうしてこの一帯ではマルクノイキルヘンの他、クリンゲンタール Klingenthal、シェネック Schöneck で 17 世紀中に、シェーンバッハ Schönbach（チェコ名ルビ Luby）では 18 世紀初頭までにヴァイオリン製作が手がけられるようになった[10]。

---

[8] 1620 年 11 月 8 日にボヘミアのプラハ近郊の山、ビーラー・ホラでハプスブルク軍とボヘミア人プロテスタント貴族との間で繰り広げられた宗教戦闘。

[9] 佐々木（1995）：24 ページ、Dullat（1997）：pp.14-15、Fischer(2006)：p.58。

[10] なお、ドイツにおけるヴァイオリン製作地として第一に言及されるミッテンヴァルトでマティアス・クロッツ Mathias Klotz（1656-1743）がイタリアでヴァイオリン製作を習得した後に楽器製作工房を設立したのは 1683 年頃とされ、フォークトラントよりやや遅れて

ドイツのヴァイオリン製作において中心地と見なされるのはフォークトラントより後発のミッテンヴァルト Mittenwald で、フォークトラントのヴァイオリンはミッテンヴァルトに比べていくらか品質で劣ると見なされたこともあったが、佐々木はその理由として、豊富であったエルツゲビルゲ山脈の材料となる木材が 18 世紀後半には不足気味となって近隣、後には外国から移入せざるを得なくなったこと、楽器製造業が盛んになって多様な商人層が形成されたことでギルド的生産体制が崩れ、量産体制に入ったことを挙げ、「フォークトラント製品」という言葉が低品質と同義語であったとも指摘している[11]。

しかし、このような側面があったにもかかわらず、ヴァイオリン本体から始まった楽器製造業は少しずつ周辺的な方面へと広がりを見せ、18 世紀に入って弦楽器用の弓、続いて弦の製作にも乗り出す者たちが現れた。弦楽器と切り離せないこれらの製品製造はごく自然な流れと言うことも可能であろうが、すぐに地元での需要を上回る量が確保できるようになり、取引が増大するにつれ、この地域での楽器製造業の形態が確立する一助となったとみることができよう。ヴァイオリンに続いてやはり弦楽器のギターが 18 世紀末に、同じく撥弦楽器のツィターが 19 世紀中ごろに作られるようになった。時期が前後するが、後述するように 19 世紀前半にはクラスリツェ、クリンゲンタールでハーモニカの製造が始まっていたことも確認されている[12]。ギター、ツィター、ハーモニカのいずれもウィーンでの流行を受けて当地に導入されたらしい。クリンゲンタールは、ハーモニカ製作でトロッシンゲン Trossingen と並ぶ中心地となった。

これらと異なり、ドイツで生まれた 2 種類の蛇腹楽器が現在もフォークトラント、特にクリンゲンタールとゆかりが深い。アコーディオンは 1822 年にフリードリヒ・ブッシュマンによって考案されたと言われ、世界中に広まったが、ハーモニカ・メーカとしても名高いトロッシンゲンと並んで、クリンゲンタールに本拠を置くハルモナ社が主要なメーカーである。やはりドイツ生まれの楽器として知られるバンドネオンは、1847 年にハインリヒ・バンド Heinrich Band により考案され、以来、代表的なメーカーはすべてドイツ国内に存在してきた。もっとも有名なアーノルド社[13]やマイネル&ヘロルド社はザクセンに、ホーナー社はトロッシンゲンで製造し、アルゼンチン・タンゴの流行により新たな楽器産業として 20 世紀の前半に隆盛を迎えている。

このようにして、19 世紀中ごろまでにフォークトラントは多種多様な楽器製造で世界的に有名になり、最大の輸出国であったアメリカ合衆国の領事部が 1893 年から 1916 までマルクノイキルヘンに置かれたことからも、この様子をうかがい知ることができる[14]。

以来、フォークトラントは「楽器作りの地域」として知られてきた。東ドイツ時代には

始まったことが分かる。

[11] 佐々木（1995）：25 ページ。

[12] Restle(2003)：pp.42-43.

[13] アーノルドの名前で知られるバンドネオン・メーカーにはアルフレッド・アーノルド Alfred Arnold(AA、または Doble A、1911 年創業）とアルフレッドの父であるエルンスト・ルイス・アーノルド Ernst Louis Arnold（1861 年創業）の 2 社があるが、いずれもザクセン州のハレに近いカールスフェルトに拠点を置いていた。この 2 社は多くの演奏者たちが支持するバンドネオンの名器を生み出したに。

[14] 在アメリカ合衆国ドイツ代表部 HP より。
http://www.germany.info/Vertretung/usa/en/07__Culture__Lifestyle__Trave（2009 年 9 月 30 日アクセス）

社会主義政策の実施により、手工業的な楽器作りから、大衆向けの安価な楽器作りへと方針転換が図られ、大規模な楽器製作が行われるようになったが、1989 年の体制転換以降、徐々にクラフツマンシップを重視する楽器作りへと戻りつつあり、町・村ごとの特色も打ち出そうとしているようであり、これらの考察は本プロジェクトの今後の課題でもある。上述の他にフォークトラントには、木管楽器をはじめとする各種楽器製作者が集まるエールバッハ Erlbach、ドレスデン工科大学の楽器製作研究所が設けられているツヴォータ Zwota などが比較的知られた町・村である。また、現在はチェコに属しているクラスリツェには金管・木管楽器メーカーとして名高いアマティ・デナク Amati-Denak 本社があり、年間に 60000 以上の楽器を世に送り出している。

なお、ツヴォータ出身の詩人マックス・シュメーラーMax Schmerler（1873-1960）は楽器製造に関わるフォークトラントの一帯を「音楽の片隅 Musikwinkel」と呼び、ドイツ人の間でもこの一帯はこの愛称で知られてきたが、近年になって新たな動きが出てきている[15]。体制転換から 10 年を経た 1999 年に歴史的な楽器製造の地域として、楽器製造業だけでなく、地域経済（政策）、文化産業、総合的な研究といった面と連動させる地域振興策プロジェクトとして立ち上げ、積極的にアピールしようという動きが実現した。これは、シリコンヴァレーをもじって「ムジコン・ヴァレーMusicon Valley」と名付けられ、200 を超えるパートナーよりネットワーク的に構成される団体となっている[16]。中小製造業者が特色のこの地域をより積極的にアピールして商機につなげると同時に、音楽体験のパッケージツアーを実施するなど、啓蒙・教育活動にも重点が置かれている[17]。

Ⅲ　クリンゲンタールとリード楽器

この項は、2009 年９月に現地調査を実施したクリンゲンタールに焦点をあて、フォークトラントの中の一地域を通して、楽器製造業と音楽文化創生の様子を探ることを目的とする。

１.クリンゲンタールの楽器製造とリード楽器

クリンゲンタールと楽器との関わりはⅡの２.「楽器製造の歴史」で触れたように、ボヘミアのクラスリツェから移り住んできた者たちがヴァイオリンを作ることから始まったとされている。この頃は芸術音楽としてのヴァイオリンというよりも、ヴァイオリンを弾く農民が楽器も作っていたと見られるが、たとえばそのうちの Hopf 家は 17 世紀後半から 20 世紀にいたるまで、ヴァイオリン作りを世襲で受け継いできた家系として知られ、同じフォークトラントのマルクノイキルヘンと並んでクリンゲンタールがヴァイオリン作りの中心地の一つと認知されることに大いに寄与している[18]。

こうして楽器産業で知られるようになったクリンゲンタールは、19 世紀に入って新たな

---

[15] 体制転換、東西ドイツ統一後の時代には、Musikwinkel の名称を知る者も激減し、また、フォークトラントの楽器製造はヨーロッパ諸国のみならず、国内的にも知名度を失っていたため、楽器の売り込みに苦労した、と佐々木は述べている。佐々木（1995）：28 ページ。

[16] 詳しくは http://musiconvalley.de

[17] ドイツ連邦教育・研究省の助成を受けている。

[18] Zoebisch（1999）には８代 280 年以上にわたる Hopf 家の詳細な系図が付されている。

タイプの楽器の製造にかかわるようになる。それはいずれも金属リードを使用しているフリー・リード楽器であるハーモニカとアコーディオン、およびコンサーティーナ（バンドネオン）である。

ハーモニカはオルガンの調律用に 1820 年頃に作られた音具がルーツと言われるが、1829 年には早くもクリンゲンタールでこの楽器の製造を Johann Wilhelm Rudolph Glier が手がけるようになった[19]。こうしてクリンゲンタールではヴァイオリン製造に関わっていた者たちが徐々にハーモニカ産業へと移行していったとされるが、この最初期の 1847 年からクリンゲンタールにおいてハーモニカ製造に従事してきた C.A.Seydel Söhne は、現存する世界で最も古いハーモニカ・メーカーとして知られている。

ハーモニカとほぼ同じ 1822 年にさかのぼるとされるアコーディオンだが、この名で知られるようになるのは 1829 年（ウィーンのピアノ・オルガン職人のデミアンによる）で、この年の 5 月にこの楽器で特許が申請されている。クリンゲンタールでは、1836 年以来ハーモニカを製造してきた Johann Christoph Herold が 1852 年にアコーディオン製造の会社を設立したことが知られており、これが当地におけるアコーディオン製造の始まりとされる[20]。

イギリスとドイツでほぼ同じ時代に作られるようになったと見られるコンサーティーナは、ドイツでは Carl Friedrich Uhlig が手がけたとされ、1834 年に特許を取得している。このコンサーティーナにはいくつもの（ボタン型の）鍵盤システムがあり、それによって呼び名が異なるが、おそらくはそれが属している（ドイツの）コンサーティーナよりも有名になってしまったのが、バンドネオンだろう。ハインリヒ・バンドはこの楽器を 1847 年に考案したが、クリンゲンタールにほど近いカールスフェルトで Carl Friedrich Zimmermann によってバンドネオン工房が設立されたのが 1854 年、クリンゲンタールでも 1862 年にはこの楽器の製造が始まっていたとされている[21]。

このようにして 3 種類のフリー・リード楽器の製造が 19 世紀中ごろからクリンゲンタールで手掛けられるようになるが、折しも音楽産業が庶民とも関わりを深めていく時代にあって、これらの楽器、とりわけソロに、伴奏に、アンサンブルに活用し得て、ポータビリティにすぐれ、豊かな音量も持っていたアコーディオンとコンサーティーナはたちまち高い需要を誇るようになり、この町の楽器製造の中心となっていった。Kauert（2000）[22]によれば、1871 年にフォークトラントではアコーディオンとコンサーティーナ製造に従事する中・小規模工房が 663、ハーモニカのそれが 347 あったが、そのうちクリンゲンタールには前者が半数以上の 352、後者が 25 あったという。19 世紀末にはアルゼンチン・タンゴが成立、特に 20 世紀に入ってその中でバンドネオンが使用され、定着するようになると、ドイツから大量のバンドネオンが海を渡って輸出されるようになる。クリンゲンタールの楽器製造業もこのブームに大きく依存するようになり、1920 年代には町の収入の大半が楽

---

[19] Kauert(2000)：pp.15-16。
[20] Grimm(2002)：pp.8-9。
[21] Kauert(2000)：p.20。当該箇所には 1862 年創業の Handels- und Gewerbekammer Plauen 社の 1862-63 年年次報告書には「クリンゲンタールでのアコーディオン、コンサーティーナ製造は 1851 年頃に始まった」とある、との記述がある。
[22] Kauert(2000)：p.21。

器製造に拠っていた[23]。やはり Kauert(2000)[24]によれば、1928 年には 73 の工房で 1350 人の職人が勤務していたほか、3500 人が家内工業で楽器を製作していた。

こうして確立されたクリンゲンタールでのフリー・リード楽器製造であるが、中小の工房は第二次世界大戦後の 1949 年に当地がドイツ民主共和国（東ドイツ）に編入されると、そのほとんどが国営化された[25]。しかし、佐々木（1995）によれば[26]、コメコン経済体制下での国際的分業経済の中で東ドイツは楽器製造業を担い、その結果、フォークトラントの楽器工業は大きく躍進したとされる。そして、その中でもアコーディオンが全体の 52.7 パーセントを占めていた。販路はソ連・東ヨーロッパ諸国が大半であり、プロフェッショナル用演奏楽器というよりは、教育的・娯楽的な用途に供するものが中心となった。その点で第二次世界大戦前とが大きく様相が異なっているが、このようにしてフリー・リード楽器作りが体制の変化を受けた後も継続したことが、東西ドイツ統一後のこの地域の再生に大きくかかわったことは言うまでもない。

２.リード楽器製造と音楽生活

こうした活気は単に産業レベルにとどまっていない。楽器職人やその家族は、楽器を生み出すだけでなく、自らがその楽器を手にし、音楽活動にもいそしんだ[27]。いわば「音楽の街」という位置づけを、その愛好的な精神によって確固としたものにしたが、そうして培われた土壌は、20 世紀半ばになってフリー・リード楽器の音楽家育成へとつながる新たなイヴェントを作り出した。それは「国際アコーディオン・コンクール Internationaler Akkordeonwetterb Klingenthal」で、1948 年に開催された「アコーディオン・ソロとデュオのためのコンクール」に端を発している。このコンクールは、こうした音楽好きの土壌に支えられつつも、やはりクリンゲンタールの基幹産業としてのフリー・リード楽器作りという点を強く意識している。コンクールの HP[28]に記載されているコンクールの主たる目的を記述すると、

・アコーディオン、バンドネオン[29]演奏をサポートする
・ソロ、アンサンブルそれぞれのアコーディオン音楽のレパートリーを開拓する
・アコーディオンとオーケストラのアンサンブル演奏を普及させる
・経験の交換
・新しいアコーディオンのための音楽の紹介

---

23 クリンゲンタールに工房を構えた楽器製造所の中には、AA と並んでバンドネオンの名器を生み出した Meinel & Herold 社もあり、1920~30 年代に最盛期を迎えた。
24 Kauert(2000)：p.35。
25 クリンゲンタールの楽器製造は社会主義的・半国営企業で行われていたが、近隣のマルクノイキルヘンでは非社会主義的個人経営で生産されていた、と佐々木は指摘している。佐々木（1995）：28 ページ。
26 佐々木（1995）：28~29 ページ。
27 その様子は Grimm による著述に詳しい（2000a,b および 2001a,b）。また、クリンゲンタールで入手できる数多くのローカルな CD からも具体的にうかがうことができる。たとえば“Auf unsere Bergen. Stadtorchester Klingenthal”（Rockwerk Records LC8248）のタイトルの CD をリリースしている Stadtorchester Klingenthal は、設立が 1866 年である。
28 http://www.accordion-competition.de（2009 年 9 月 15 日アクセス）
29 このアコーディオン・コンクールにバンドネオン部門が設立されたのは比較的新しく、2006 年のことである。

とある。特に最後に挙げたポイントに関しては、1952 年から参加者は課題曲の他に自由曲（“可能な限りオリジナルの作品”）を演奏することを求められるようになり、新たなレパートリーの創出こそがこれらの楽器の命脈を保つということが強く意識されているのが理解できよう。

Ⅱの２.で言及した、より大きな地域振興策としてのムジコン・ヴァレーもさることながら、こうしたソフト面からの底支えこそが、フリー・リード製造の歴史をもつクリンゲンタールを 21 世紀に再生させたとみることができよう。

Ⅳ　クリンゲンタールのバンドネオン工房

ここでは 2009 年９月のクリンゲンタールの現地調査において、聞き取り調査と見学を行ったウーヴェ・ハーテンハウアーUwe Hartenhauer 氏の工房（2009 年９月３日訪問）からの報告を記述する。

氏の工房は、谷あいに沿って細長く延びる町をかなり上っていったところにある。氏は 1962 年生まれ、すなわちドイツ民主共和国時代の生まれということになる。

氏は 1978 年に Weltmeister ブランドのアコーディオン[30]を製造する地元のハルモナ社 Harmona に就職し、同社に 13 年勤務（一貫してチューニングを担当）した後に独立、1991 年からバンドネオンの修理を専門的に手掛け、1999 年よりバンドネオン製作も手掛ける工房を設立した。

ウーヴェ氏の工房では氏の他に３人の専従の職人がおり、また、楽器製作を勉強中の高校生が見習いとして実習を重ねている。ハルモナ社がアコーディオンを大量生産するのと対照的に、一つのバンドネオンに概ね４週間、修理にも１週間と時間をかけて取り組んでいるが、氏が工房を設立した 90 年代後半に起きたピアソラ・ブームもあいまって、世界各地から修理に持ち込まれる楽器はひきもきらず、工房の棚には修理を待つ楽器が山積みの状態である。

地元に拠点をおくハルモナ社でチューニングという、リード楽器の命とも言える作業に従事していたことが現在の仕事を可能にしている訳だが、彼もフォークトラントという地域でこの楽器を作ることの意味を重視しており、その姿勢は彼の楽器作りに直接反映していることが理解できる。彼の作るバンドネオンは AA、すなわちバンドネオンの代名詞ともされるアルフレッド・アーノルド社の復刻版が主であり、同じフォークトラントのカールスフェルトで作られていた楽器である。この地域で作る意味のある楽器、ということが彼の楽器製作の根底にある。また、現在は楽器の要であるリードを隣接のチェコから取り寄せているということだが、チェコがバンドネオンのリードに使われる亜鉛を産出しているという理由に加え、やはりフォークトラントを構成する歴史的な地域であることもある。このことは、翌日に短い訪問をした、やはり AA のバンドネオンを製作する同地の Bandonion & Concertinafabrik Klingenthal GmbH の若い職人ラルフ・スカラ Ralf Skala 氏の祖父がボヘミア（現在のチェコ）からの移民であったという繋がりのように、外部者が考えるよりも、現地の人々にとっては楽器を作るということの一部を成しているように

[30] 1852 年創業。

感じられる。

工房のある建物は百年以上前に建てられたもので、当時、フリー・リード楽器を製造している工房だったというが（氏とは直接のつながりはない)、氏がこの建物を手に入れたとき、ここにはリード・オルガンをはじめとして、大小さまざまなアコーディオン、バンドネオン、コンサーティーナといった楽器が残されていたほか、昔の上質なバンドネオンを彩ってきた蝶貝の装飾の細かなパーツも発見されたという。いわば歴史的なパーツであるが、氏は自らの作る楽器にそれらを用いて伝統的な装飾をほどこし、クリンゲンタールの歴史的な記憶をそうして楽器に埋め込むことで、新たに生み出された楽器が単なるカールスフェルトの AA のコピーではなく、21 世紀のクリンゲンタールで製作された歴史的楽器という意味づけをしている。こうした姿勢からは、楽器製造の伝統に立脚した地域再生の有りさまと、新たに打ち出そうとしている“クリンゲンタール”ブランドという意識の両面を見てとることができる。

V　今後の課題

今後の課題としては、以下が挙げられる。

①この地域の楽器産業を支えてきたのは交易路であったことに象徴されるように、古くから人の移動も要因の一つであるが、歴史上の出来事としてだけではなく、社会変動によって引き起こされた現在の労働力の移動までを含めて考察する。

②地場産業との関わりに加え、旧東ドイツの解消後、再び小規模な伝統産業に回帰する有様を検討せねばならない。このことは、安価な楽器が市場を寡占しつつある現在の楽器業界にあって、この地域の楽器製造のあり方がユーザーの要望に細やかに対応し得る産業構造を有し、ある意味でグローバル化へのアンチテーゼと見なし得るのか、重要な検証課題である。

③歴史、地理、産業の視点に加え、地域が文化発信を試み、地域再生と連動させる様も明らかにせねばならない。人離れ・空洞化が目立つ旧東ドイツ地域の中で短期間に改善を示した当該地域は、他地域へのモデルケースを提供し得ると考えられる。

④フォークトラントの楽器産業の起源では、ボヘミアからの宗教難民が関わった経緯が言及されている。ドイツとチェコの人的交流は拡大 EU 後に顕著となっているが、7 世紀に既に形作られた基盤の延長線上にあることを、歴史学と音楽学、地理学のそれぞれの視点から説明を試みる必要があろう。

⑤旧東ドイツ時代には社会主義諸国への安定供給が保証されてモノ作りの技術は低下したが、国営・半国営でない個人職人も数多く存在し続け、これが体制転換以後の地域の復興に結びついたと見ることができる。この面からの詳細な調査もなされなければならない。

⑥フォークトラントの楽器産業はワザの伝承に支えられてきた。それは徒弟的な在り方から始まり、1858 年にヴァイオリン製作の学校が設立されるなど、時代と地域の要請に応じて形作られてきた。こうした歴史的伝承法に加え、現在、産学連携を地でいく地元の複数の大学との提携が見られる。伝統と現代の技術双方を活用した人材育成の様子

を考察することも不可欠である。

主な参考・引用文献

佐々木 博、1995、「旧東ドイツ Vogtland の楽器工業の変遷」『人文地理学研究』19、21-46 ページ。
田中宏、2009、「欧州統合とユーロリージョン : 越境協力の第三段階」『立命館經學』57(4)、517-529 ページ。

Cˇerný, Jaromír, Klaus-Peter Koch (eds.), 2002. *Mitteleuropäische Aspekte des Orgelbaus und der geistlichen Musik Prag und den böhmischen Ländern. Koferenzbericht Prag 17.-22. September 2000.* Sinzig: Studio Verlag.
Dullat, Günter. 1997, *Der Musikinstrumentenbau und die Musikfachschule in Graslitz von den Anfängen bis 1945*. Nauheim: Günter Dullat.
Dunkel, Maria, 1987. *Badonion und Konzertina. Ein Beitrag zur Darstellung des Instrumententyps.* München, Salzburg: Musikverlag Emil Katzbichler
_____, 1999. *Akkordeon-Bandoneon-Concertina im Kontext der Harmonikainstrumente*. Bochum: Augemus Musikverlag
Grimm, Johannes, 2000a. *Das kleiner Klingenthaler Musikantenbuch. Heft 1.* Klingenthal: Kulturband Ortsverein Klingenthal e.V.
_____, 2000b. *Das kleiner Klingenthaler Musikantenbuch. Heft 2.* Klingenthal: Kulturband Ortsverein Klingenthal e.V.
_____, 2001a. *Das kleiner Klingenthaler Musikantenbuch. Heft 3.* Klingenthal: Kulturband Ortsverein Klingenthal e.V.
_____, 2001b. *Das kleiner Klingenthaler Musikantenbuch. Heft 4.* Klingenthal: Kulturband Ortsverein Klingenthal e.V.
_____, 2002. *Das kleine Klingenthaler Akkordeonbuch*. Klingenthal: Kulturband Ortsverein Klingenthal e.V.
_____, 2009. *180 Jahre Harmonikabau in Klingenthal.* Klingenthal: Kulturband Orts-
Häffner, Martin, 1994. "Schwäbische Zieorgeln für die Welt. Trossingens Aufstieg zum Weltzentrum der Harmonikaindustrie." *Neue Zeitschrift für Musik*. Februar, pp.36-37
Kauert, Kurt, 1994. " Brummkasten aus dem Musikwinkel. Klingenthals Harmonika-Vergangenheit." *Neue Zeitschrift für Musik*. Februar, pp.38-40.
_____, 2000. *Der Musikwinkel und die Harmonika*. Marienberg: Druck- und Verlagsgesellschaft Marienberg mbH.
Kürsten, Annelie, Sarah Brasack, 2006. *Berichte des interkulturellen Forschungsprojektes "Deutsche Musikkultur im östlichen Europa"*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
Moeck, Hermann (ed.), 1987. *Fünf Jahrhunderte Deutscher Musikinstrumentenbau*. Celle: Moeck Verlag.

Musikinstrumentenbauer in Sachsen, Sachsen-Anhalt und Thüringen. 2006. Berlin: Dacapo Pressbüro.
Restle, Conny (ed.), 2003. 》*In aller Munde*《 *Mundharmonika Handharmonika Harmonium Eine 200-jährige Erfolgsgeschichte.* Berlin: Staatliches Institur für Musikforschung.
Zoebisch, Bernhard, 1999. *Die Geigenmacher der Familie Hopf in Klingenthal.* Blankenburg: Stiftung Kloster Michaelstein.

350. Geburtstag Matthias Klotz Begründer des Mittenwalder Geigenbaus ホームページ http://www.matthias-klotz.de/ （2009 年 9 月 30 日アクセス）